

支部だより

# 珠のつえ

平成31年 4月 18日

第121号



発行所

公益社団法人 全国珠算教育連盟

青森県支部

所在地 三沢市中央町4丁目4-6

☎0176 (53) 3662

支部長 斎藤 隆

責任者 福士隆行

## 第65回全国珠算研究集会 初めての青森開催！

3月31日(日)、青森市のリンクステーションホール(市文化会館)に於いて第65回全国珠算研究集会在開催されました。研究集会の長い歴史の中で初めてとなる本県支部開催は、3年前の第62回研究集会の際に決定、以後周到に準備を進めてきました。



前日は、昼12時から本部研修委員、事務局、支部長、各部長の打合せ会、午後1時に支部役員が集合、本部委員との打合わせがあり1時30分に「珠算指導者教養講座」参加者の受付を開始、緊張感漂う中、役員は各部署に散っていきました。午後2時からの「珠算指導者教養講座」は、八戸学院大学短期大学部客員教授の三村美千代氏が『古典文学の中の数について…昔の人は数をどうとらえていたか』と題し講演しました。(詳細は別掲)

当日は風が冷たく、時折雪がちらつくあいにくの天気となりましたが、北は北海道オホーツク支部から南は九州沖縄支部まで約470名、青森県支部からは82名の先生が参加しました。午前10時、工藤壽和副理事長が開会を宣言、平上一孝理事長が「青森県は世界遺産の白神山地、特別史跡の三内丸山遺跡に代表される風光明媚な地であり、参加者を癒しの世界へと誘ってくれるでしょう。この研究集会を通じて、お互いが珠算教育を語り合い様々な角度から研究意欲の向上を図っていただければ幸いです」と挨拶しました。高見太也文部科学省初等教育教育局参事官付・産業教育振興室長、三村申吾青森県知事、木村次郎衆議院議員、有村治子参議院議員が祝辞を述べたあと、斎藤隆支部長が歓迎の挨拶を行いました。続いて研究助成論文審査経過が岡久泰大研究論文審査会委員長より報告され、能登金文先生が「開平の理論と指導」で研究奨励となり表彰されました。

11時より「青森が世界に誇る芸術家…棟方志功」と題し、一般社団法人棟方志功記念館館長補佐の武田公平氏が講演、故郷青森をこよなく愛しその作品に大きな影響を与えたこと、文化勲章よりも青森名誉市民表彰の方がうれしかった志功の想いが語られました。(詳細は別掲)昼食休憩をはさみ、午後1時30分より大阪府支部の大垣憲造氏が「さかのぼり珠算史・帰除法の実習」と題し研究発表、岩手県支部の関谷揚子氏が「矯正教育としての珠算の役割…立ち直りを支える一助に」と題し、感動の実践発表を行いました。4時10分からの閉会式

ではスクリーンに「次回は兵庫でお会いしましょう」と映る中、澤田悦子研修学教委員長、次年度開催支部の奥野宜孝兵庫県支部長が挨拶、岡久泰大副理事長の閉会の言葉で平成最後の全国珠算研究集会は幕を閉じました。終了後の4時40分、支部委員が舞台前に集合、研修学教委員長、理事長より「素晴らしい研究集会でした。ありがとうございます」と労いの言葉を頂くと、緊張の糸が切れ、成功の安堵感から支部委員の嬉し涙が止まりませんでした。次回は、令和2年3月29日(日)に兵庫県姫路市で開催される予定です。



## 第65回全国珠算研究集会 前夜祭 十和田地区：関向 知寿

平成31年3月30日(土)青森市のホテル青森孔雀の間で盛大に行われた前夜祭。次第通りに進む中でも及川義明支部顧問が歓迎の挨拶の中でうたわれたり、工藤壽和副理事長の青森県各地方の方言講座があったりと非常に和やかでありました。青森色満載の流れのなか、さらに畳みかけるかのような余興のねぶた凱立会の方々のお囃子に太鼓。そして高橋竹春さんを始めメンバーの方々の津軽三味線に唄に踊りがありました。青森県民ではあるものの、初めて間近で体感する太鼓の迫力や、三味線の技には驚きしかありませんでした。また久しぶりに会う先生方や、初めて会う先生方とお話をする機会もあり、たくさんの刺激を受け久しぶりに体の内側からあつい熱が帯びてくるのを感じ、私自身とても素敵な時を楽しむことができました。最後には、佞武多囃子にあわせて掛け声を掛け合い、大盛況の内に斎藤隆支部長の三本締めでお開きとなりました。他県の先生方も口々にすごい歓迎だったと喜んでおりました。また、会場を出ると歩道にうっすら雪が積もっていて雪国としての、おもてなしも出来たのではないかと勝手に喜んでおります。『北国に 集いし珠の仲間たち 夢をかけ算 そろばんの道』及川先生がうたわれた、まさにその通りの前夜祭だったと思います。



## 検定試験 十段合格者

- ◇ 389回検定試験 (平成31年1月27日) 珠算 赤塚 桜菜 (三沢地区)
- ◇ 390回検定試験 (平成31年3月24日) 暗算 蛭沢日菜乃 (三沢地区)

…珠算指導者教養講座…

「古典文学の『数』について」を受講して  
西北五地区：三上 多恵子

三村三千代先生の講座終了後、一番印象に残った言葉が「数は面白い」だった。まずは、数を把握すること。人間は、数を認識したことにより、記録することを考えた。棒に切れ目を入れて数を表し、それを半分にして、貸借を表したそうである。人間はぱっと見では5程度を認識し、イルカは8までは分かると言われているそうである。動物も数を把握しているということ、カラスと人間の出来事で説明されていた。カラスは、人間の出入りを確認して、いたずらをしていたそうである。塔に上がる人数と下りる人数を把握し、塔に人間が居るかどうかを判断し、居ないことを確かめて、いたずらをしていたのではないかという話があるそうだ。カラスは、6までは把握できると言われているということを知り、私達人間はカラスに負けたことにショックを受けた。

縄文時代、三内丸山遺跡の六本柱建物跡では、柱穴の間隔4.2m、幅2m、深さ2mで統一されていることで、測定の技術が存在していることを示しているものであり、4.2mは35cmの倍数であり、35cm×12=4.2mとなり、十二進法が基本ではないかと思われるそうである。この時代、身体尺という咫(あた)→手を開いた中指～親指の先(約15cm)、拳(つか)→握りこぶしの幅、尋(ひろ)→両手いっぱい広げた長さを使っていたようである。この身体尺が縄文尺にどう関わっていたかはわからないそうである。どの身体尺を使っても、35cmには、ならないようで、はっきりしたことは言えないそうである。

漢字は、中国から伝わったものであり、それまでは口伝であった。万葉集では、まだ平仮名は使われていないため、全て漢字で表記しなければならなかった。その中で、漢数字は数を表すためだけに使うのではなく、文字を表すために使っていた。この時代、人々が遊び心を使って和歌を書き記していたことに驚いた。「十六社者」は、ししこそばと読み、 $4 \times 4 = 16$ を、「許乃間立八十一」このまたちくくと読み、 $9 \times 9 = 81$ のように九九を使って表した言葉もある。このことから、中国から九九が伝わっていたと言われている。この時代に、九九を使っていたことにも驚きであった。

和歌は、日本においてのコミュニケーションツールであり、現在のメール以上であったようである。歌合(現在の歌合戦)という選ばれた選手による勝負の場があった。この歌合戦は、20番勝負、50番勝負…1500番勝負と、この勝負のために日々のトレーニングが必要であった。

この講座を通して、受講者はそれぞれ感じたことはあると思うが、現代社会において進むべき道を考えることも大事なことだと思うが、先人の知恵や思い等を再認識することも大切なことであり、そこから新発見することも多いのではないだろうか。私は、そう感じた。



…魔法の画伯…

世界に誇る芸術家、棟方志功を想う  
むつ地区：工藤 和廣

【平成の終わりに…】最近、このフレーズをよく耳にする。平成31年3月31日、リンクステーションホール青森に於いて「平成最後」の第65回珠算研究集会被開催された。この集会被に参加できたこと、また支部役員として本当に少しであったが協力できたことを大変嬉しく思っている。三人の方が発表してくださったが、志功記念館の館長補佐・武田公平氏が講師を務められた講演について述べてみる。私は、小さい頃夏休みを浅虫で過ごすことが多かった。裸湯?の直ぐ向かいであった。風呂上りに食べるチンチンアイスは、コップでも井でもとにかくいっぱいしてくれ、実に美味かった。目の前が川であり、下りると蛇口があり捻るとお湯が出て大人は炊事洗濯等していたが、子供には楽しい遊び場であった。今はその面影はない。父親や親類の墓所が在ったお寺の近くに、画伯縁の椿館が在り、法事等で時々訪れていた。其処で目にするのが画伯の作品であった。とんでもない事だが、ゴッホや画伯の物くらいなら自分でも何とか成りそうと思った。皆さんもそう思いませんか?だが、何か魅かれるものがある。観れば観るほどに魅かれていく。不思議である。その後、記念館にも行ったがやはり観るたびに、年を重ねる程に引込まれていく自分がいた。まるで魔法にでも掛かったのではないだろうか。

【画伯の魔法?】画伯には魔法の力が有る。そうでなかったら同県人に対する愛着か。講演を聞くまでそう思っていた。講師は、朴訥で誠実な語り口であった。画伯の人生についてはテレビ放送で見ており、若い頃の話は父親からよく聞いていた。上京し絵の世界から版画に心惹かれ、試行錯誤のうえに代表作「二菩薩釈迦十大弟子」に到達する。白と黒から色鮮やかな作品へ、還暦を過ぎてからの自画像の作品を制作するようになっていく。同時に、「望郷の作品群」と呼ばれる、これまでとは全く趣の異なった版画作品を制作する。風景ではなく、人体で表現している。これが私には理解出来ない所だった。講師は、これらの作品の制作意図を、非常に丁寧に説明してくれた。やっと分かった。私が魅かれていたのは魔法の力ではなく、作品の持つ力であった。だが私にとって棟方志功は、魔法の画伯でいて欲しい。名誉市民表彰、そして文化勲章受章は当然の結果であろう。大変素晴らしく、又嬉しい講演でした。ありがとうございました。

【令和のはじめに…】すでに、このフレーズをよく耳にする。令和元年8月25日、むつ市に於いて「令和最初」の歴史的な支部総会被開催されます。会員の皆様全員の参加をお待ちしています。



令和元年5～7月の行事予定表

- 5/22(水) アメリカンスクールコンテスト (三沢市公会堂)
- 5/26(日) 第391回検定
- 6/8(土) 第50回県大会 兼 東北七県予選会 (リンクステーションホール青森)
- 6/23(日) 6月検定
- 7/21(日) 第392回検定
- 7/30(火) 第47回東北七県大会 (リンクステーションホール青森)

